

# フランス国立図書館における敦煌文書「朋友書儀」調査について

野田 有紀子

## はじめに

今回の渡仏の目的は、ポール・ペリオ (Paul Pelliot, 1878-1945) がフランスに将来した「敦煌文書」(ペリオ文書)のうち「朋友書儀」を調査することにあつた。本稿ではまずⅠでフランスにおけるペリオ将来敦煌遺物の収蔵施設について述べ、Ⅱでパリ国立図書館旧館での「朋友書儀」調査報告を行うこととする。

## 1. フランスにおけるペリオ将来敦煌文書・美術の収蔵施設

### (1) フランス国立図書館 (Bibliothèque Nationale de France) 東洋文書部門 (département des Manuscrits, division orientale)

現在フランスにおいてペリオの将来した敦煌文物は、文書類はフランス国立図書館 (BnF) に、美術品はフランス国立ギメ東洋美術館にと分蔵されている。このうちフランス国立図書館は14世紀のシャルル5世による王立図書館を起源とし、現在は2区のリシュ

リユー通りにある旧館 (1875年完成、【図1】【図2】【図3】) と、13区のベルシー地区にある本館 (1994年完成) から構成され、敦煌文書を所蔵する東洋文書部門は旧館の一角に所在する (【図4】【図5】)。なお旧館は現在大規模改修工事中であり、それにともない東洋文書部門も所蔵文書を移すため、来年からしばらく敦煌文書も閲覧不可となるとのことである。

2009年1月12日 (月) にはパリ共同ゼミ参加者全員



【図1】 リシュリユー通りに面するフランス国立図書館旧館



【図2】 改修工事中のフランス国立図書館旧館



【図3】 フランス国立図書館の由来を記した石版



【図4】 東洋文書部門のある棟の入り口



【図5】 東洋文書部門の閲覧室入口



【図6】 モネ氏による東洋文書部門コレクションについての講義

で東洋文書部門を訪問した。東洋文書部門の学芸員ナザリー・モネ Nathalie Monnet氏・ヴェロニク・ベランジェ Véronique Béranger氏から、フランス国立図書館および東洋文書部門コレクションについての講義を受けた（【図6】【図7】）。

東洋文書部門閲覧室での資料閲覧にさきだち、別棟の事務室で研究者用の「閲覧カード」を作成した（【図8】）。有効期限1年間のうち15日間閲覧できるもので、料金は35ユーロであった。

閲覧室での資料出納には資料請求用紙（【図9】）に資料名および氏名・住所を記入して提出するほか、敦煌文書のような貴重資料の場合は、別にピンク色の書類に記入し、サインして提出する必要がある。

また閲覧室入室に際しては、コート類・鞆・袋などをすべてクローゼットにしまわなければならない。閉室時間になるとベルが鳴らされるが、退出にあたってはすべての資料返却の確認が済むと、ドアの施錠が解除されて退出できるシステムである。

## (2) フランス国立ギメ東洋美術館 (Musée Guimet)

一方、ペリオの将来した敦煌文物のうち、美術品類が収められているのがフランス国立ギメ東洋美術館である（1889年開館、【図10】）。創立者の実業家エミール・ギメ（1836-1918）のコレクションを中心に、アジア各地からもたらされた貴重な美術品が収蔵されている<sup>1</sup>。



【図10】 フランス国立ギメ東洋美術館



【図7】 「敦煌文書」を閲覧する一行



【図8】 閲覧カード  
（表・裏）



【図9】 資料請求用紙

今回の渡仏中、おりしも特別展「敦煌の至宝—仏教芸術の1000年、5世紀から15世紀まで」(Trésors de Dunhuang - Mille ans d'art bouddhique - Vème- XVème siècles) が開催されており、ペリオのもたらした貴重な仏像・彫像・壁画などの美術品を多数目にする事ができた（【図11】）。

## 2. 敦煌文書「朋友書儀」調査

### (1) 敦煌文書「書儀」と分類

敦煌文書とは1900年に中国甘粛省敦煌市の莫高窟で発見された数万点にも上る文書類である。20世紀初頭にイギリスの探検家オーレル・スタイン Marc Aurel Steinや、フランスの東洋学者ポール・ペリオ Paul Pelliotがそれぞれ数千点を買収して母国に持ち帰り、現在、大英図書館に「スタイン文書」、フランス国立図書館に「ペリオ文書」として所蔵されている。残りは北京図書館に収められ、また日本・ロシア・ア



【図11】 特別展ポスター（左）と展示風景（右）

アメリカにもわずかながら分蔵されている。

さて敦煌文書には仏典・書籍・戸籍・台帳・法典などさまざまな分野の文献が含まれているが、そのなかに書状の模範文例集「書儀」がある。中国で最も古い書儀としては西晋の索靖『月儀』が知られ、唐代にもさまざまな「書儀」が著されている。敦煌文書としても100点近い「書儀」が伝わっているが、「応順三年(953)」（p2505背）と記されているように、これらは唐末期9～10世紀の写本であると考えられている。

周一良氏はこうした敦煌文書の「書儀」を三種類に分類する<sup>2</sup>。

- (A) 朋友書儀……正月から12月まで、月ごとの私的な挨拶状文例を順番で配したもの。
- (B) 吉凶書儀……婚礼・葬礼に関する書状文例集と、家庭における儀礼次第。
- (C) 表状箋啓書儀……公私のさまざまな事務に関する書状文例集。

## (2) 「朋友書儀」の構成と写本系統

このうち「朋友書儀」は、趙和平氏によれば以下のような構成となっている<sup>3</sup>。

- ① 最初に、それぞれの月ごとに季節に関する慣用句（例：正月孟春に「啓春・首春・初春・早春・春首・献春・時春・余寒・尚寒」）を並べる。
- ② つぎに「十二月相辯文」として毎月の往復書状（正月は往状のみ）を一通ずつ載せる。
- ③ 最後に「朋友相念」として、12ヶ月の順番で簡単な往復書状文例を載せる。これは②が官吏用なのに対し、一般人向けの文例とみなす。

12ヶ月の各往復書状は、西域辺境に赴任した人物が内地の友人との間で交わした離別を嘆く内容が多い。

さて現在、敦煌文書中に計13部の「朋友書儀」写本が伝わっているが、趙和平氏はこれらを以下のような系統に分類している（pはフランス国立図書館蔵ペリオ文書、sは大英図書館蔵スタイン文書としての番号を示す）。

〔第一系統〕 p2505, p3375, p3466, p3420

〔第二系統〕 p2679, s5472, s5660, s361背

〔第三系統〕 p4989背, s5660

〔その他〕 s6180, s6246 など

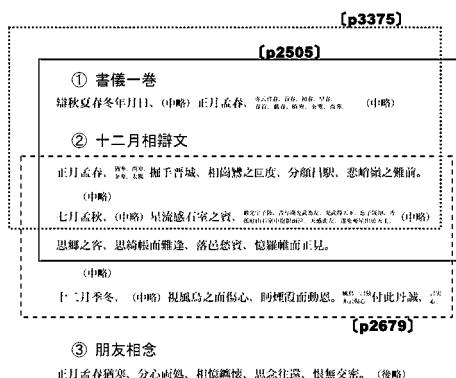
以上の各系統は、たとえば〔第一系統〕には「正月孟春、<sup>猶寒、尚寒、余寒、太寒。</sup>掘手晋城」と割注があるのに対し、〔第二系統〕には「正月孟春、掘手晋城」のように割注が含まれない等の違いがある。

フランス国立図書館蔵ペリオ文書には「朋友書儀」のさまざまな系統が存在するが、今回幸運にも直接閲覧できる機会に恵まれたので、「朋友書儀」のうち比較的状態が良く、釈文の定本とされるほどまとまって残っている、〔第一系統〕の(a) p2505と(b) p3375、〔第二系統〕の(c) p2679について調査することとした。

なお各資料の残存状況は、おおよそ【図12】のとおりである。調査日は2009年1月10日(土)・12日(月)・13日(火)の計3日間であった。

## (3) 「朋友書儀」各資料調査

各資料は巻かれた上に、外側を布で包まれ、さらに布紐で結ばれた状態で保管されていた。



【図12】「朋友書儀」残存状況

(a) p2505

状態は、ところどころ小さな穴が開いており、裏は薄い紙で裏打ち、表はモスリンで補強されていた。

寸法は、総長約221cm×高さ約29~31cm。全6紙で継目幅は2~11mmまでと、歪みが目立つ。紙の高さや継目幅が不揃いで、罫線をはみ出して書写されている部分も少なくない。実際に地方官人または地方教育機関の学生が、書状文集もしくは文章の教材として利用するために作成されたものと推定される。

また文章全体に朱で読点が振られており、たとえば冒頭部分では以下のごとくである。

書。儀一卷。

辯秋夏年月日。(年唐虞曰載。夏日歲。商曰祀。周曰年。易曰稔。齡並可通用。稔者惣以年。言之。經云。數年。亦余年。踰年。二年。累年。三年云。歷年。積年。惣而言之。頻移歲稔。屢改炎涼。亦云。頻移歲暑云。屢移歲序。云灰琯。屢遷此等。証經年已上。任情用之。)

「。」の位置は字の右下が多いが、中央部に振られているものもある。また読点としてのほか、「書。儀」「正。月。孟。春。」のように字間にも打たれている。これらの朱点は書写されたときに振られたのか、あとから利用者が振ったのかは不明である。また裏書も、「広順參年」「広順參年二月十四日時節」は墨書だが、その上部の「三界寺僧沙弥戒浄書記」は朱書であった。

なお『法藏敦煌西域文献』に掲載された資料写真のほとんどは白黒写真のため朱点や朱書が確認できないが<sup>4</sup>、フランス国立図書館の電子図書館サイト「ガリ

カ」(Gallica、<http://gallica.bnf.fr/>)ではカラー版写真が掲載されている。ただし現在はまだ直接データ番号を打ち込まないと閲覧できないが、年内には検索ページから検索できるシステムが公開されるとのことである。

なお『敦煌写本書儀研究』および『唐五代書儀研究』掲載録文<sup>5</sup>との異同は、①の部分では、「辯秋夏年月日、(年、……「并」可通用、)の「并」→「並」、(月、(始一月云改月、……「并」可通用、)の「并」→「並」、(春時、(春「曰」青陽、)の「曰」→「云」。②のうち一月分では、「絶使蓮舟有「藕」の「藕」→「藕」、(「辺城「僭」絶」の「僭」→「僭」、(但某乙辺城独「嘆」の「嘆」→「歎」、(「夕「望」碧波」の「望」→「往」などを指摘できる。

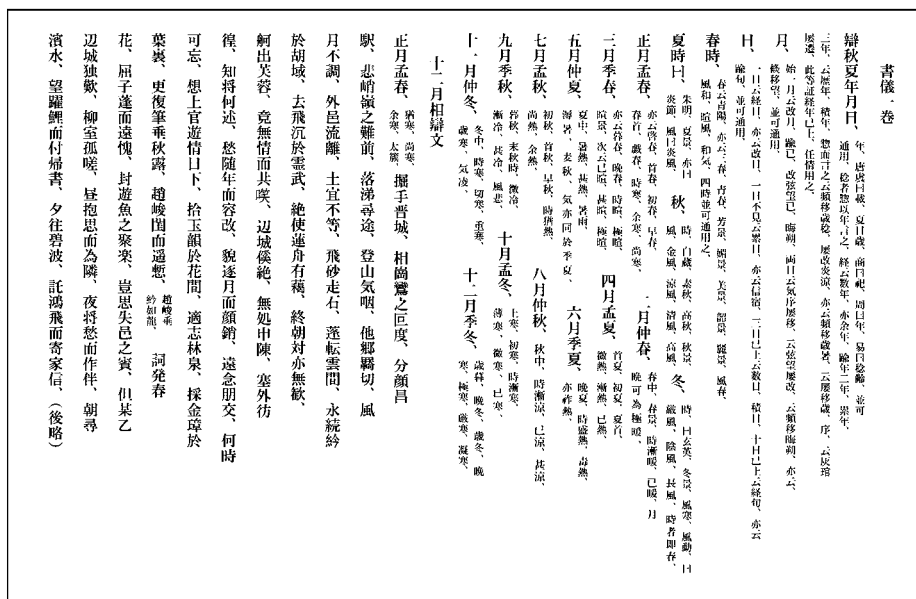
(b) p3375

状態は、裏は薄い紙で裏打ちし、表はモスリンで覆われている。

寸法は、総長約196cm×高さ約30cm。全5紙で、継目幅は5~10mmまでとばらつきがある。また書写の状態も、「冬、(時、曰玄英、冬景、風寒、風動●曰)」「昼抱思而為●隣」のように書き損じを墨で塗りつぶして、横や下にそのまま書き加えている。これも(a)と同様、地方官人や学生が「実用品」として利用するために作成した書物だからであろう。

(c) p2679

状態は、裏は薄い紙で裏打ちされているが、表は大きな穴が開いている前部のみモスリンで覆われ、それ以後は本紙が露出した状態であり、破れ切れも目立つ



【図13】 p2505釈文 (②正月まで)

など状態が悪い。

寸法は、総長約397cm×高さ約29～30cm。全10紙で、継目幅5～13mmまでとばらつきがあり、歪みがある。ただし〔第一系統〕(a)(b)と比べると字間も十分にとられ、罫線からはみ出さないように比較的丁寧に書写された印象を受ける。書写された元の書物が違うため、書写者の階層や書写の目的が異なっていたのかもしれない。

#### おわりに

今回の調査旅行では、フランスにおけるペリオ将来敦煌文物のおもな2か所の収蔵施設である、フランス国立図書館旧館とフランス国立ギメ東洋美術館とを訪問し、文書および美術品を閲覧した。これによりフランスにおける敦煌文物の保存状態や利用システムなどについて、より総合的に理解することができた。

またパリ国立図書館旧館では「朋友書儀」を実見して、写真版では確認し得なかった不統一な紙の寸法や紙継目の厚さや歪み、あまり丁寧とはいえない書写の有様、不揃いな朱点の打ち方など、公文書との明確な違いが確認できた。これらの「書儀」は、敦煌に赴任した官人が書状文例集として用いたり、寺院などの教育機関において教材として利用されたりなどした、「実用品」であったからであろう。

日本古代の往来物や書状の研究を進める上で、それ

らの成立に大きな影響を与えたといわれる中国の書儀・書状の研究は不可欠である。今後はさらに、唐代を中心とした中国古代の書儀・書状についての調査・研究を進めたいと思う。

#### 註

- 1 ギメ東洋美術館所蔵のペリオ将来の美術品については、ジャック・ジエス『西域美術—ギメ美術館ペリオ・コレクション』全2巻（講談社、1994-1995年）に詳しい。
- 2 周一良「唐代書儀の類型」（『講座敦煌5 敦煌漢文文献』、大東出版社、1992年）。
- 3 「朋友書儀」についての解説や釈文は、趙和平『敦煌写本書儀研究』（台湾・新文豊出版公司、1993年）、周一良・趙和平『唐五代書儀研究』（中国社会科学出版社、1995年。初発表は1985年）。なお「表状箋啓書儀」については、趙和平『敦煌表状箋啓書儀輯校』（中国・江蘇古籍出版社、1997年）に釈文がある。
- 4 ペリオ文書の写真は、p2025は法国国立図書館・上海古籍図書館編『法藏敦煌西域文献』巻14（中国・上海古籍出版社、2001年）、p2679は巻17（2001年）、p3375は巻24（2002年）に収録されている。
- 5 註2書。

[付記] 本稿は、平成19年度文部科学省科学研究費補助金若手研究（B）による研究成果の一部である。

のだ ゆきこ／お茶の水女子大学リサーチフェロー